



日本聖公会 川越基督教会

資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

第 15 号
2025 年
12 月 25 日
発行

教育史国際学会 (ISCHE) での報告

山口みどり

Two Transnational Experiences Interconnecting Each Other



ISCHE での報告スライドの一部

ケンブリッジ大学での一年間の研究期間も残り少なくなっていました。私は19世紀から20世紀初頭におけるイギリス国教会をジェンダーの視点から研究しており、今回の在外研究では、主に2つの研究を進めています。そのひとつは19世紀における歌ミサに関するもので、10月初めにケンブリッジ大学内部の研究会で、一度報告をしました。もうひとつがここ数年続けている宣教師の研究で、フランスとイギリスの学会で報告を行いました。とくに7月にフランスのリールで開かれた教育史の国際学会 ISCHE (International

Standing Conference for the History of Education) 2025 では、川越基督教会資料委員会の取り組みも紹介したので、それについて報告しましょう。

ISCHE2025 では、2025年初めに亡くなった世界的な教育史家ジョイス・グッドマン先生の追悼セッションが設けられました。グッドマン先生は国家の枠組みを超えた「トランサンショナル」な人の移動やつながりに注目したことで知られます。近代日本の教育改革を扱った近年のプロジェクトでは、海を越えて学び、教えた教育者たちが教え子や社会にもたらした直接的・間接的な影響

もコンセプトのひとつとなっていました。

そこで、私は影響の連環という視点から、川越基督教会資料委員会の取り組みと私自身の研究とを紹介してみました。資料委員会の国際色豊かなメンバーは、20世紀初めにやはり海を渡って川越にやってきた女性宣教師たちに強い関心を寄せ、その活動を精力的に追っています。両者の「トランジショナル」な経験が呼び合ったといえるでしょう。日本の女性たちが宣教師の母校である女性執事訓練校に留学し、グッドマン氏のプロジェクトが見出したものと類似したトランジショナルなネットワークが、川越とアメリカにも築かれました。

さて、私の研究は隣の東京教区にイギリス

からやってきた SPG の女性宣教師を扱っているのですが、ヘイウッド先生やアプタン先生など、川越にやってきた大卒女性たちの活躍を伺っているうちに、彼女たちの派遣がイギリス側に与えた影響も気になってきました。SPG は当時すでに「大卒」女性を東京に送っていましたが、オックスフォード大学やケンブリッジ大学ではまだ女性には正規の「学位」は授与していなかったのです。すぐ隣の川越に、アメリカの聖公会は「学位」を持った女性宣教師を派遣してきた。この事実は、イギリスの宣教師教会そしてイギリス社会に何らかの影響を与えたのではないかでしょうか。トランジショナルな影響の連環に関心が広がっています。

(歴史資料委員)

多彩なウィリアム・メレル・ヴォーリズ

(1880年-1964年)

川越キリスト教会にもなじみがある

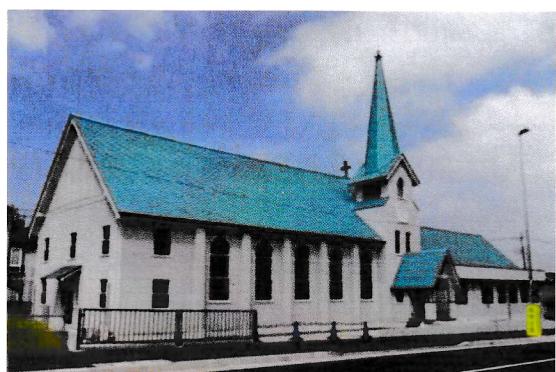
ベーリ・ドウエル

ウィリアム・メレル・ヴォーリズは我が教会関係の欧米宣教師のひとりエリザベス・アプタン（1880年-1966年）とほぼ同じ時代に生きたし、ほぼ同じ頃日本で活躍しました。アプタンの場合は主に埼玉県内で幼稚園作り・子供教育などに力を入れて、ヴォーリズの拠点は滋賀県の近江八幡でほぼ全国との関わりがありました。

滋賀県で用があり、加えて近江八幡市へ尋ねました。歴史資料委員会の山本元さんの先祖は近江商人と伺い、近江商人はどんな物かもう少し学ぶ機会になると思いました。また江戸時代、殆どの皆さんは殆ど移動しないと思いながら山本さんは近江商人が幅広いところで活躍して、不思議と感じました。

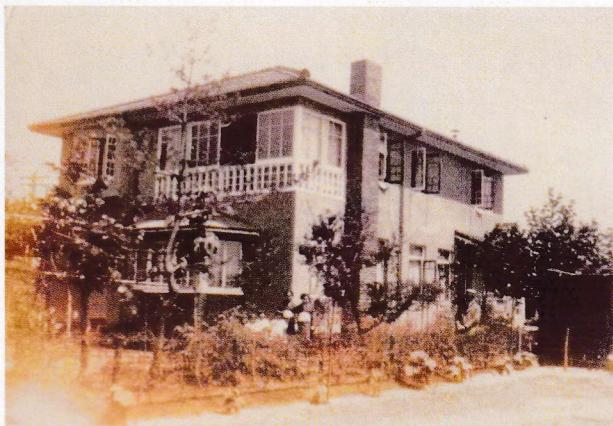
近江八幡市に着いたら旧市内へ移動して、町家の一部は様々な資料館になり、興味深い展示や説明委員の話がありました。近江商人について学びながらヴォーリズ設計された建造物（20棟程は近江八幡に存在）や資料館や像などもあり、初め

て近江八幡はヴォーリズの拠点と分かりました。本人は建築家（家、教会、学校、青年会館、商業施設などなど）、キリスト教プロテスタントの信徒伝道者、社会事業家、実業家（「メンソレータム」などの輸入や販売、後製造も、ハモンドオルガン輸入や販売などなど）であり、結局欧米近江商人でした。



川越近くのヴォーリズ建築例は入間市武藏豊岡教会で、旧石川組の製糸場隣に建てたもので日本聖公会の礼拝堂もいくつかも設計しました。北

関東教区の場合は土浦日本聖公会聖バルナバ教会です。



川越キリスト教会信徒の里見眞さんの実家は大阪府堺市浜寺で、ウォーリズ設計でした（現存せず）。里見さんにより「祖父とウォーリズの関係ですが、先代から千葉の九十九里教会（川越教会よりも歴史は古い）の信徒の家で生まれ育ち、慶應大学時代には学生基督教青年会（学生 YMCA）の設立に奔走する熱心なキリスト教徒だった様です。勤めが東京から大阪に移り、関西での財界活動や

YMCA 活動が中心になりました。祖父が大阪 YMCA 理事長になったのが大正 14 年なので、その頃にはウォーリズに自宅の設計を依頼していたと思います（自宅が竣工したのが大正 15 年（昭和元年）（1926 年）です）。その話の続き「建物の設計に当たり、祖父は北欧の建物の様にシンプルで簡素な物で良いと注文を出した様です。そのため、一般的なウォーリズらしい建築とは趣が少し異なります。祖父は合理主義者だったので、自宅は質素で家族が楽しく安全に過ごせればよいので部屋数は必要最小限の機能的な箱で良いとの考えを伝えたようです。」その他に「同じ、浜寺にウォーリズ設計の近江岸邸があります。こちらはウォーリズらしさのある建物で国の有形重要文化財に指定されています。」

里見さんは浜寺の里見邸の写真を提供していただきました。

読者の皆さん、どこかのウォーリズ設計の建物をご覧になったことがありますか。1600 棟程の実績がある様です。

（歴史資料委員長）

ボイド先生からの贈り物

玉木純子

昭和の初めに教会で活躍された米国人宣教師のボイド先生のことは、まだ記憶に残る方々もおられることでしょう。1928（昭和 3）年に初雁幼稚園の園長に就任しました。ここでは二人の信徒の女性の方から聞いた、ボイド先生にまつわるお話を記したいと思います。

たった一人で海を渡るような強い信仰に導かれた宣教師の女性は、信徒の女性たちから大変尊敬されたようです。他方、欧米で親しまれている文学、最新のファッショն、エレガントな振舞い方、舶来のスイーツなどをもたらしてくれる憧れの存在でもありました。※

K.O. さん（昭和 3 年頃の生。2024 年に逝去された方）に 2014 年前後に行われた読書会で聞いたお話をします。O さんのお母様はボイド先生のいた頃に教会へ通うようになり、クリスチヤンに



ボイド宣教師

なられたようです(子供に読ませる本などにボイド先生の影響があったらしい)。…子どもの頃(昭和の初期)三人姉妹で布団を敷いて寝る時に、母がいつも本を読んでくれた。『若草物語』などの欧米の少女向けの物語だった。『小公女』は主人公のセーラ・クルーがかわいそうでかわいそうで、お母さんの後ろに隠れて布団に顔を押し付けたまま、声を出さずにおいおいと泣いたものだった。

次はE.Mさん(昭和7年頃の生)から2016年に聞いたお話。Eさんのお母様は川越女子高校へ通っている頃、人から誘われて教会に行きボイド先生と出会ったそうです。…母は両親を早くに失くしていたのでボイド先生からは本当に良くしてもらっていた。牧師と結婚したのもボイド先生の計らいがあったようだった。当時(昭和7年)教会での結婚式は珍しかったと思う。ドレスやフラワーガールの衣装などを東京から取り寄せてくれたのもボイド先生だった。花嫁と花婿の後ろを歩くフラワーガールはK.Oさんのお姉さんと奥山司祭のお嬢さんだった。

自分たち三人の姉妹は子供の頃、押し入れからウェディングドレス、ペチコート、絹の靴を取り出して、「結婚式をしましょう」と言って楽しく遊んでいた。しかし母親に見つかると、「大事なものだからやめなさい!」と叱られたものだった。

ボイド先生の(東松山聖ルカ幼稚園での)保育は厳しく、怖かった。鼻水をたらしていると必ず鼻をかませられた。

母は夫とも対等に話した女性だったが、それはボイドさんの教育が影響していたのだろうと思う。当時は珍しいことだった。

第二次世界大戦が終わった頃、米国からの小包が届いた。箱を開けると干からびたチョコレートが出てきた。祖国に送り返されたボイド先生が戦時中に贈ってくれたものだった。長い間差し止められていたためにこんなことになってしまい、とても残念だった。

※参考文献:『憧れの感情史』山口みどり・中野嘉子編著 2023作品社
(歴史資料委員)

川越と小泉八雲を繋ぐもの

— 薩摩琵琶とアイリッシュ・ハープのコンサートから —

青木 倫子

川越市六軒町の中央公民館分室(現在は貸出し停止中)は、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の長男・小泉一雄氏の大宮の邸宅を移築した建物であることをご存じでしょうか(写真1)。

一雄氏は大宮時代、この邸内で小泉八雲の形見である和机に向かって、『父「八雲」を思ふ』を著しました。またその後、一雄氏が東京へ戻ったのち、この邸宅が川越に移築される経緯などは、一雄氏の長男、小泉時氏の著書に詳しく記されています。1)

さて、小泉八雲とその妻セツをモデルとした今年度後半のNHK朝ドラが好評を博しています。後に『怪談』を世に送り出す八雲は、アイルラン



写真1:六軒町の川越中央公民館分室
(カワゴエールHP²⁾より)

ド人の父とギリシャ人の母のもとに生まれ、幼少期にはアイルランド・ダブリンの叔母の家で多感な時期を過ごしました。アイルランドの民話文化から深い影響を受けた八雲は、“ケルト文学と日本文学をつなぐ架け橋”として、今日もなお特異な存在感を放ち続けています。

そのアイルランド出身のトーマス・蘭杖（らんじょう）氏と妹のトリーナ・マーシャル氏によるデュオ・コンサートが、10月30日に当教会にて開催されました（写真2）。

トーマス氏は、ダブリンの聖アン教会において音楽ディレクタ兼オーガニストを務める一方、かつて日本に14年間滞在し正派薩摩琵琶を学ばれ、国内外に多くの門弟をもつ演奏家です。妹のトリーナ氏は、アイルランドの伝統音楽グループ「チーフタンズ」でも活躍する古楽器アイリッシュ・ハープの名手。開演前から、市内のみならず県外から多くの問い合わせが寄せられ、期待の高さがうかがえました。

このコンサートは、川越市在住の大学教授ヒュー・デフェランティ氏（リベラルアーツ／音楽学）のご紹介によって実現しました。デフェランティ教授は、1920～30年代の川越の音楽生活に関する論文を発表しており、その前文には、各地の琵琶奏者との交流が紹介されています³⁾。トーマス氏とのつながりも、こうした精力的な研究活動の中で生まれた、日本の伝統音楽を深く愛する外国人音楽家（演奏家と研究者）同士の幸運な邂逅であったのかもしれません。

当日のコンサートはかつてないほどの多くのお客様をお迎えし、音楽委員会スタッフも慌ただしさと緊張に包まれる中、第一部のトリーナ氏によるアイリッシュ・ハープのソロから始まりました。アイルランドの古い民謡や日本の子守歌を織

り交ぜた響きはどこか懐かしく、聴く者をやわらかな夢の世界へと誘いました。緊張していたスタッフの心さえも、次第にほぐしてくれるようなひとときでした。

続く第二部では、一転してトーマス氏の薩摩琵琶が礼拝堂を圧倒しました。大きな撥で荒々しく弦をかき鳴らす奏法による『平家物語』の「屋島の誉れ／崩れ』は、迫真的緊張感に満ち、狂気すら思わせる揺れ動く音が礼拝堂の空気を引き締めました。そこにふとアイリッシュ・ハープが柔らかく重なると、まるで天の国へといざなわれるような浮遊感が生まれ、両者の対照が見事な美しさを描き出しました。

その演奏を、川越の私たちの教会の中で聴けたことの喜びをあらためて噛みしめました。

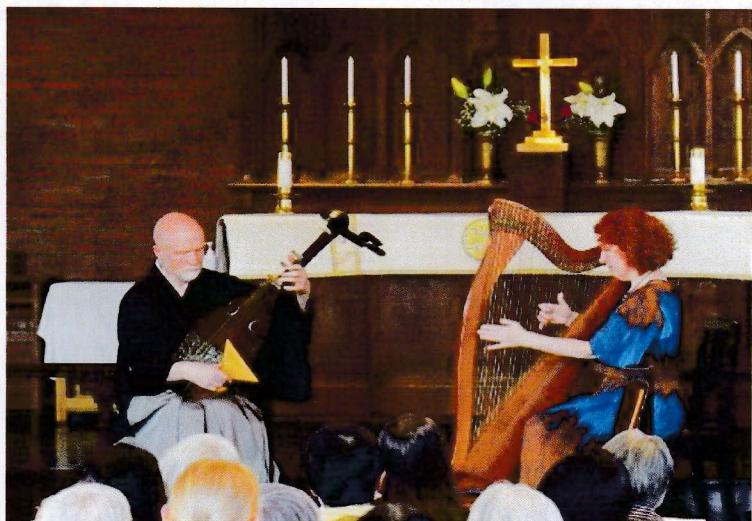


写真2：薩摩琵琶とアイリッシュ・ハープのコンサート

コンサートの締めくくりには、袴姿のトーマス氏のパイオルガン伴奏のもと、氏が選んでくださった聖歌481番（アイルランド民謡「ロンドンデリー・エア」の旋律）を会衆全員で歌い、礼拝堂は温かな連帯感に満たされました。演奏後には、日本各地から訪れた薩摩琵琶の愛好者や門弟の皆さんと、川越での再会と出会いを喜び合う姿が印象的でした。

小泉八雲『怪談』に収められた「耳なし芳一」

は、平家琵琶による「壇ノ浦合戦」を語る作品であり、今回の薩摩琵琶「屋島の誉れ／崩れ」と主題や時代は異なるものの、いずれも平家物語の源平合戦を題材とした琵琶芸能です。デフェラント教授の論文にも、大正期の川越の寄席で筑前琵琶(近代琵琶)が用いられた記録が見られます。

川越と八雲を結ぶ糸は、細くとも実は古くから幾筋もあったのかもしれません。そして今回のコンサートは、その見えざる糸が、さまざまな人々の思いと祈りに導かれるようにして結ばれたものだったように感じました。

最後に、私だけが知る小さなエピソードをひとつご紹介して終わりたいと思います。

礼拝堂での演奏はコンサートホールとは違い、外の音がそのまま入り込んでいます。今回も、アイリッシュ・ハープの演奏中の幽玄の世界の中に突然、極めて現実的な救急車の鋭いサイレンが響く場面がありました。わずかな狂いも許すまいと

食事や休憩も惜しんで調弦に集中していたトーナ氏の胸中を思い、私は心が痛くなりましたが、彼女はなぜか微笑んでいました。

後に理由を伺うと、「サイレンの音階が弾いていた曲と同じ調だったから、楽しくデュエットしてしまったの」とのこと。

そのしなやかな感性に触れ、また常に謙虚で門弟から慕われるトーマス氏の姿とも重なって、私自身も思いがけず幸せな出会いをいただいたように感じています。

[参考資料]

- 1) 小泉時 1990 『ヘルンと私』 東京：(株)恒文社
- 2) <https://www.kawagoe-yell.com/sightseeing/chuokopinkan-bunsitu/>
- 3) de Ferranti, Hugh. 2007. "Musical life in regional cities of the 1920s and 1930s: a preliminary consideration of Kawagoe." 大東学論集 Daitō Gakuronshū 7:111-118

(歴史資料委員)

歴史資料委員会より

諸先輩を覚える礼拝

毎年11月は教会の暦で「諸聖徒月」、そして11月1日は「諸聖徒日」。この日の記念礼拝ではこの教会に連なり、天に召された425名の聖職者、信徒の名が読み上げられました。教会草創期よりこの教会の礎を築かれた諸先輩方の働きを改めて想う時となりました。

3年後には、川越基督教会宣教150周年の年を迎えます。この教会に相応しい記念行事を求めてその作業は開始されました。

地域の諸団体との交流

川越の歴史文化を研究する団体「川越民俗の会」(大野正巳会長)の11月例会が、この教会を会場にして開催されました。私たち歴史資料委員会も特別参加させていただきました。

教会の歩みを学び、古い街に出来た初めてのキ

リスト教会、ここで働かれた宣教師、教育事業等について熱心な意見交換の時を持つことが出来ました。

次の「礼拝堂見学会」の準備

例年、春秋に開催してきた礼拝堂見学会、本年は5月の連休に「川越に吹いた西洋の風」をテーマに実施、多くの皆さんをお迎えしました。秋季の川越まつりに併せた会は、準備が整わず順延となりました。来年5月開催に向けて新たな企画を加え準備を開始しました。



歴史資料委員会 2025年12月25日発行